

きつねのつかい

新美南吉

山のなかに、猿や鹿や狼や狐などがいつしよにすんでおりました。

みんなはひとつのあんどんをもっていました。紙ではった四角な小さいあんどんでありました。

夜がくると、みんなはこのあんどんに灯をともしたのでありました。

あるひの夕方、みんなはあんどんの油がもうなくつていることに気がつきました。

そこでだれかが、村の油屋まで油を買いにゆかねばなりません。さてだれがいったものでしょう。

みんなは村にゆくことがすきではありませんでした。

村にはみんなのきれいな猟師と犬がいたからであります。

「それではわたしがいきましよう。」

とそのときいったものがありました。狐です。狐は人間の子どもにばけることができたからでありました。

そこで、狐のつかいときまりました。やれやれとんだことになりました。

さて狐は、うまく人間の子どもにばけて、しりきれぞうりを、ひたひたとひきずりながら、村へゆきました。そして、しゅびよく油を一合かいました。

かえりに狐が、月夜のなたねばたけのなかを歩いていきますと、たいへんよいにおいがします。気がついてみれば、それは買ってきた油のにおいでありました。

「すこしぐらいは、よいだろう。」

といって、狐は、ぺろりと油をなめました。これはまたなんというおいしいものでしょう。

狐はしばらくすると、またがまんができなくなりま

した。

「すこしぐらいはよいだろう。わたしの舌は大きくな
い。」

と行って、またぺろりとなめました。

しばらくしてまたぺろり。

狐の舌は小さいので、ぺろりとなめてもわずかなこ
とです。しかし、ぺろりぺろりがなんどもかさなれば、
一合の油もなくなってしまう。

こうして、山につくまでに、狐は油をすっかりなめ
てしまい、もつてかえたのは、からのとくりだけでし
た。

待っていた鹿や猿や狼は、からのとくりをみてため
いきをつきました。これでは、こんやはあんどんがとも
りません。みんなは、がっかりして思いました、
「さてさて。狐をつかいにやるのじゃなかった。」
と。

「きつねのつかい」

※『校定 新美南吉全集第四巻』（1980年
9月30日、大日本図書株式会社）の「き
つねのつかい」をもとに編集しました。

※このテキストを個人的に読む以外の利
用をされる場合には、新美南吉記念館ま
でご連絡ください。（TEL：0569-26-4888）